

『雪の学院を去る律の巫女 ― 母の涙と磁石の杯 ―』

「塵を払いし者、ついに風となる。」

― 古き学院の碑文より ―

古き学院の冬の朝、律の巫女は、静まり返った教室に佇んでいた。
空気清浄の箱を開けると、埃がふわりと舞い、朝の光の中で銀粉のようにきらめいた。

彼女はその埃を手で払い、布でぬぐい、
まるで自らの心の片隅に溜まった思念を拭うかのように、
一つひとつ丁寧に磨いていった。

「もう、ここを出よう。」
そうつぶやいた声は、やわらかく空気を震わせ、
教室の壁や黒板の奥深くにまで届いた。

長くこの学院に身を置き、教えることと学ぶことの狭間に立ってきた彼女は、
いま、古き知の場を後にしようとしていた。

その夜、別れの宴があった。
律の巫女は帰ろうとしていたが、
ふと振り返り、「もう少しだけ」と思いなおした。
彼女は杯を手に、皆と共に笑い、語り、
長い年月の情と労を胸の奥に沈めていった。
別れの宴は、ただの送別ではなく、
心の内なる“役割の終わり”の儀式であった。

翌朝、教室の壁には、無数のポスターが貼られていた。
過去の活動、未来への希望、誰かの思い出。
律の巫女はその一枚一枚を見つめた。
そこへ現れたのは、学院の守り主。
彼は静かに生徒たちに言った。
「まだ完全には信頼できぬ。だが――話すことはできる。」
そして、彼は余分なポスターを剥がしはじめた。

壁が少しずつすっきりしていく。
その音は、心の中の古い言葉が剥がれ落ちる音にも似ていた。
律の巫女も、自らの貼り残した紙片をはがし、
深く息をついて立ち上がった。

机の上には、小さな磁石の杯があった。
その台とコップがぴたりと吸い寄せ合う。
律の巫女は微笑んだ。
「これは、心と身体が一つになる印。」
磁石の杯は、
彼女が長き修行の末に授かった“統合の道具”であった。
それは、理性と感情、言葉と沈黙、動と静とを結ぶ、
目に見えぬ力の象徴だった。

その夜、夢の中で彼女は不思議な劇を見た。
雪の降る街、母と娘。
娘は、八日に行けなかったことを悔やみ、
母は泣きながら言った。
「実母だからこそ、九日があると思えたのです。」
その言葉は、冷たさではなく、深い信頼の響きをもっていた。

母の愛は、もはや依存ではなく、
“信じて手放す”という智慧へと変わっていた。

雪の中を歩く娘——
その姿は律の巫女自身であった。
白い息を吐き、口を固く結び、

彼女はただ前へと歩みつづけた。
新たな決意の道行きとして。

そして、夜明け。
律の巫女はからだを動かしてみた。
からだは思いのほか軽く、
これまでの緊張が嘘のように解けていく。
「なんて楽なんだろう。」

その驚きは、からだの自由とともに、
心の柔軟さを取り戻した歓びでもあった。

こうして彼女は、
古き学院を後にし、雪の路を歩み出す。
背に磁石の杯を携え、
母の涙とともに、

律の巫女の新しい巡礼の章が始まった。